

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
（分担）研究報告書

中枢性感作関連症状を呈する筋骨格系疼痛患者の特徴
疼痛範囲及び罹患期間に関する研究

研究分担者 西上 智彦 県立広島大学 保健福祉学部 理学療法学科 教授

研究要旨

疼痛が広範囲に及んでいる患者は、CS 関連症状を呈するリスクが高く、臨床症状にも関連しているため、CS の影響を考慮して治療を選択する重要性を明らかにした。

西上智彦

県立広島大学保健福祉学部理学療法学科
教授

A. 研究目的

慢性期だけでなく、急性期においても中枢性感作（CS）関連症状が認められることや、CS は広範囲頭痛に関連することが報告されている。今回、CS 関連症状を呈する筋骨格系疼痛患者の特徴（罹患期間と疼痛範囲）を検討した。

B. 研究方法

筋骨格系疼痛患者 637 名を対象に、中枢性感作症候群（CSI）、疼痛（BPI：Pain intensity, Pain interference）、健康関連 QOL（EQ5D）を評価した。統計学的解析は、疼痛範囲（体幹、四肢体幹+四肢）と罹患期間（3ヶ月未満、3ヶ月以上）を要因、CSI を従属変数とした二元配置分散分析を行なった。また、疼痛範囲及び罹患期間で CSI が 40 点以上となるオッズ比を算出した。さらに、EQ5D, BPI について疼痛範囲、罹患期間をそれぞれ要因とした。一元配置分散分析を行なった。有意水準は 5%とした。

（倫理面への配慮）

本研究は甲南女子大学倫理委員会の承認を得て行った。

C. 研究結果

CSI は、各要因で有意な主効果を認め、体幹+四肢群は、他の 2 群と比べて、また、罹患期間が 3ヶ月以上の群は、3ヶ月未満の群と比べて有意に高値であった。オッズ比は疼痛範囲（体幹+四肢/体幹もしくは四肢）で 3.1、罹患期間（3ヶ月以上/3ヶ月未満）で 1.8 であった。EQ5D, BPI は、体幹+四肢の群と他の 2 群に有意差を認め、罹患期間では Pain intensity でのみ有意差を認めた。

D. 考察

痛みの部位と痛みの持続時間の両方を評価することの有用性が明らかになった。臨床家にとって、CSI に関連する症状の可能性を容易に評価できることは重要である。

E. 結論

疼痛が広範囲に及んでいる患者は、CS 関連症状を呈するリスクが高く、臨床症状にも関連しているため、CS の影響を考慮して治療を選択する重要性が示唆された。

F. 研究発表

1. 論文発表

Tanaka K, Nishigami T, Mibu A, Imai R, Manfuku M, Tanabe A. Combination of Pain Location and Pain Duration is Associated with Central Sensitization-Related Symptoms in Patients with Musculoskeletal Disorders: A Cross-Sectional Study. Pain Pract. 2021.